

幼児期における系列的調整の発達

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
富井 奈菜実

本研究では系列的調整ができはじめる前後の時期の対比的認識の獲得過程、3 次元の認識の獲得過程を分析することによって、系列的調整の背景にある認知発達の構造を検討した。本研究において、対比的認識とは「大きい」「小さい」などのように二極化にとらえる認識をいい、3 次元の認識とは「中」の概念が成立し、これを「大きい」や「小さい」とは区別してとらえる認識をいう。

本研究は、研究Ⅰと研究Ⅱからなっている。研究Ⅰの対象児は、2 歳後半から 6 歳前半までの合計 114 人、研究Ⅱの対象児は、3 歳前半から 6 歳前半までの合計 95 名であった。研究Ⅰでは系列的調整ができないと思われる幼児期前期に焦点をあて、幼児の対比的認識が発展していく過程を研究した。研究Ⅱでは系列的調整が可能となりはじめる幼児期後期の幼児を対象とし、系列的調整の成立過程を研究した。

研究Ⅰの結果から、幼児は 2 歳後半から 4 歳前半までは対比的認識、4 歳後半以降は 3 次元の認識のもとでものごとをとらえていることが明らかとなった。よって幼児の認識は 4 歳なかば頃に質的に変化するといえる。研究Ⅱの結果から、系列的調整は 5 歳後半からできるようになることが明らかとなった。5 歳後半は 3 次元の認識が可能となっている時期であり、系列的調整は 3 次元の認識のもとで可能になることが示唆された。一方、4 歳後半から 5 歳前半の幼児は系列的調整がまだできていなかった。つまり 3 次元の認識を獲得していても、系列的調整ができない時期があることが明らかとなった。さらにこの時期の幼児は、対比的認識にもとづいた 3 次元の序列（「小よりは大きいけど、大よりは小さい」という認識のもとで中を選択する）によって 3 次元の認識を可能にしていると考察された。したがって系列的調整には、対比的認識にもとづくのではない、より確かな 3 次元の認識を獲得することが重要であると考えられる。3 次元の認識が可能であるかを確認する課題において、通過率が 9 割を超えるのは 5 歳後半以降であることが示された。よって、より確かな 3 次元の認識が可能になるのは 5 歳後半からであると考えられる。

以上から 3 次元の認識をより確かにし、系列的調整を可能にしていくには、新たな認知構造が必要であると示唆された。本研究の結果から、この認知構造が確立するのは 4 歳前半から 5 歳前半の時期であると示唆された。しかし、これがどのようなメカニズムのもとに成立するのかについてはまだ明らかにされていないため、今後検討していく必要がある。